



Title	札幌農学校・トルストイ・日露戦争 - 一学生の日記と回想 -
Author(s)	松澤, 弘陽
Citation	北大法学論集, 39(5-6下), 659-678
Issue Date	1989-10-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/16668
Type	bulletin (article)
File Information	39(5-6)2_p659-678.pdf



[Instructions for use](#)

札幌農学校・トルストイ・日露戦争

——一学生の日記と回想——

松澤弘陽

目次

- I 明治三六・三七年日記
- II Wakaki hi no Onodde・偲草 後篇
解説

I 明治三六・三七年日記

明治三六年

一月十七日

夜は夜学校*ニ行く九時前に帰舎安倍の室ニ至り暫時談話後
歸りて、レジュアレクシヨンを讀み十二時に至り就寝す

* 遠友夜学校、以下*印は松澤の補注。

** トルストイの『復活』の英訳 *Resurrection*。

三月二十日

英語の試験あり。不勉強の爲め目的はづれて大ニ困しむ。

最後に残りしは逢坂と伊崎と余とのみなりしが逢坂ニできて吾れもあやしげの答案を出して教室を去り、吐意気をつく天罰とは之れなんぬり。

.....

夜学校ニ竹田と共に出掛く雨さへ降りて道路極めて悪し石川、半沢ニ氏去りたれば八時頃帰りにテニソンを少し読む。午後はトルストイを二頁計り読む。

三月二十一日

ジャマンの試験あり丁度時間に出づ。正午迄図書館に在りて黒岩氏の『靈魂不滅説』*を読む。かつて聖書の研究*を読みしと同じけれどそれにては統の方のみ見しなれば意義貫徹せざりしもこれにはくわしくモニズムの事を論ぜられたり物質皆有生の哲理を基礎として論ぜしなれど末だコトゴトク感服の議論に非ず。

天気は極めて良けれど風中々烈しく近頃になき大風なり。

.....

午後よりはラン・ライブを二三頁読む。

** 黒岩涙香が『万朝報』に載せた『靈魂不滅の説』(一九〇八〇二)

九〇八〇二明治三六〇二一月一日)や『靈魂不滅の説に就て』(同一月一五日)であろう。

* 内村鑑三の個人伝道雑誌『聖書之研究』。この雑誌の三〇・三一兩号(一九〇二〇二明治三五〇二一月二二日、〇三年一月一五日)に黒岩涙香の『靈魂の不滅なるを論ず』が連載された。

** トルストイの『人生論』の英訳 *On Life* であろう。

三月二十二日

夜も勉強せずトルストイの小説を少し読む。

三月二十五日

夜は逢坂氏来りて談論に花を生じ宗教、科学、人情、人事、あらゆる人間の真面目なる疑問に付て対談す。床に付きしは十時過ぎなりし

三月二十七日

午後より札幌病院ニ大光寺を見舞い二時過ぎ迄をる。
帰りてレジュアレクシヨンを三四頁計り読む。

四月四日

九時半頃より藤井氏と円山に散歩に出掛く。昨日と変わわりて
天気極めて良く風もなかりければいと暖く汗流れて今更ながら
厚着せしをくやくしく思ふ計りなりし途中にて足助氏等と会いし
かど足早に進み行きて池のほとりより藪の中ニ入り雪の下より
芽を出せし計りなるを彼れ之れと撰びて二三かぶ堀る。十一時
頃温泉に行き風呂に浴して中飯を食へ一時半頃迄遊びて帰路に
つく。

中々愉快なる清遊なりき。

夜はトルストイの小説を四五頁計り読む。

四月二十四日

午後よりは図書館に行きて之より復習講堂ニて基督伝を四時
過ぎ迄読む。

五月六日

夜は本日買ひ来りし英国士道物語*を読み了る。

*加藤眠柳訳『英国士道物語』内外出版協会、一九〇三年
であるう。

五月十五日

朝七時半より月寒の演習を見んがため学校を出立す。朝は少
しく雨降りたれば外套などを着込みて用意せしかど途中にて已
に雨模様もなくなれり豊平橋の此方ニ二小队計りの兵士休憩し
居たり橋を降りて兵士の列ニ次ぎ行く見物中々出だり演習は十
時頃より初まり兵營の少し南ニ一列となりて盛ニ発砲せり十一
時半に終る。帰途は各学校の生徒及び其の他の見物人皆一しく
帰るなれば塵の立つこと甚しく氣息もつまる計りなりし舎に帰
りしは二時、少しく昼寝す。

.....

夜は開識社なく、吾が宗教*を読む。

*トルストイの『吾が宗教』の英訳であろう。

五月二十六日

午後よりは富貴堂ニて天人論*を求め遊園地に行く。後方の馬
場ニて三十分餘ねころび岡田花園に行きて帰る。

*この月に朝報社から刊行されてベスト・セラーとなった

黒岩涙香の『天人論』であろう。

十月二十二日

午後より図書館に行きて文学書の目録をあさる中トルストイのイバンイリウオチの死を探し出して借る廣井先生の贈付けられしものなり四頁計り読みて時間となりたれば帰る。

*一八八九(明治二二)年から九九(明治三二)年まで札幌農学校教授であつた廣井勇であらう。

十月二十三日

夜は原種論*を読む。

*ダーウインの『種の起源』であらう。

十一月十日

朝より晴天なり午後農業実習休みなれば教育図書館に行く兼而より評判の嘲風ノ清見瀉の一夏の一文を読む亡友樽牛をおもへて綿々のうらみを述いたる真ニ一掬ノ涙なき能はざりき、且つ嘲風樽牛の性は彼らの間ニ往復せし手紙を讀みてより同情景ほの念ニ耐へざりしもの之れを讀で感特に深かりき嘲風は之の一文ニ於て樽牛が日蓮ニ於て安心を得たれども余はむしろ

基督ニよりにて安心を求めんと断言し基督ノ神性を論じては之れを是認せり。とに角近時快心の美文にして思想も現今の俗学者に一頭地をぬきんでたるをおほゆ。

*姉崎嘲風がこの年の一〇、十一月にわたり『太陽』に載せた、親友高山樽牛を追憶する文章「清見瀉の一夏」。

十一月十三日

夜はレジュアアレクションを読む。

十一月十七日

夜はエリーの経済を六七頁計り読む。

*Richard T. Ely, *Outlines of Economics* (New York and London, 1900)であらう。北海道大学附属図書館北方資料室所蔵の札幌農学校旧蔵書のうちにもある。

十一月十九日

為替を東京丸善ニ組む「Tolstoi, plays……」ヲ購わんためなり。

十一月二十八日

トルストイのマン・エンドマスターを読み了る。例ニ依て感心する事甚だし。

*トルストイの『主人と下男』の英訳 *Master and Man* のことと思われる。

十二月六日

午後は少しく昼寝せしか足助氏訪問せられ四時頃帰らる。子規隨筆及びマン・エントマスターを貸す。

十二月十九日

(丙) 河池氏宅を訪問し英語バイブルを借れ……

十二月二十日

朝八時半頃藤井氏来訪せられ東二丁目角のアレキサンダーと云ふ美以教会*ノ牧師の宅ニ行きバイブルの講義を聴く何を言ふやら訳が分らず講義として八元より聴くに足らねば余は某先生ノ所謂人は出来る丈け利用すべきものなりとの言に従へて英語の研究の一助となさんために行くなり豈ニ他あらんや。

* Methodist Episcopal 教会の略、現在の日本基督教団札幌教会。

十二月二十二日

半沢氏の所有なる思出の記*を借りて読む半ばかりしか読めざりしかど興味津々として湧くか如く、十二時を聞きて床ニ入る。人生問題に入りて稍ニ決心するところあり。

*一九〇一(明治三四)年に出た徳富蘆花の『思出の記』であらう。

十二月二十三日

今日は朝より外出せずして思出の記を読む、夜に入りて読了す。又々人生問題ニ付て沈思し絶望の淵ニ沈む神あり基督あり遠永あれど噫吾れにはなぐさめなし。

十二月二十四日

午後は角館氏室にありて談話す。

餘りの苦しさに青年會ニ石澤兄を訪へて、初めは牧畜上の談話ありしも最後ニ信仰問題ニ移る。未だ安心を得ざれど此の日の對話ほど余を感憤せしめ益せしめしは非らざりき

されど尚ほ疑問の雲は余が不霊の肉体を包みて真理の光を顕し給はず床に就きしハ十二時過去を顧み未来を思ふて心安んせず不覚の涙を流してねむられず。

十二月二十五日

朝は聖書を読み他の二三冊の書をも読む。

不安念尚ほおそへ来て苦しき事限りなし。

トルストイの像を画かばやと筆とり初む。

午後よりハ高池^{高田}氏宅を訪ふ夜学校の卒業式廿八日なれば中々い

そがし少しく手伝ふ。

此の日試験成績発表す結果など殆ど念頭に浮むひまだになし。

十二月二十六日

朝ハ聖書及び吾宗教を読み神二少しく心眼の開きし心地せら

れて改悔の念ニかられて祈りせりと雖も薄信の吾れ未だ天父の

愛を知らず実ニ野に迷へるの羊の如かり。

午後よりは夜学校ニ行きて式場の裝飾を手伝ふ。

夜も読書す精神上のものなり。

十二月二十七日

朝ハ聖書及び吾宗教を読むこと例の如し。

午後より又夜学校ニ行きしかど已ニ大半出来せしかば少しの手

伝のみしてストーブにあたりて足助と駄句、駄じやれの言へく

らをなす

.....

余か神ニ対する関念^{関念}は彼れは宇宙の大精神にして吾人は我等の信仰及び実行ニよりて彼れと一致するニあり之れ乃ち救拯なりと信ず

而してこの関念は曾て五年前鎌倉にありて仏教の方面より黙考せし点と符合一致せしを知り唯だ異なるハ神ニ於てハ人格を有せしことなり之の考へはトルストイ及び黒岩氏の神に対する関念と相類似せるを覚ゆ。

十二月二十九日

夜は角館氏の室ニ至り宗教を談す。足助来訪し快談の後ち辞

し去らる。

明治三七年

一月一日

噫今日は如可なる日ぞや、不冥の余を導き遲鈍の我を教へ給へし畏友国分兵吉氏の訃に接し、流涕歎歎数刻遂に主なる神の聖前に萬(原文一字空白)熱誠を以てて祈禱しぬ。生前余か靈は君によりて宗教に導かれ死後君が靈によりて吾れは神を信じ

永生を信じ薄信余が如きにも神の奇跡を実験せしめぬ萬感胸にあふれて今日の日記吾れ誌すの事なきをうらむ。

一月二日

北八条に為替受取るに行く。昨日の悲しみはなほ去りやらず途中にて色々の考へ胸に浮ぶ若し永生なくば生何の楽しみぞ希望何者ぞや吾れも又藤村君の後を追ふて華蔽百丈の懸瀑に身を投ぜんものを然れど喜ぶ可き哉吾か友の死は吾れに神の實在を示し神の摂理を顕せり。吾も又先哲の後へに従へ信仰の林に分け入り真理の泉を尋ね従令へ吾か器小なりとも神か我れに与へし能力の及ぶだけは汲みとらんものを。

一月三日

日曜日なれば藤井氏と同行して英語聖書講義に行て帰路天氣極めて宜しければ遊園地に散歩す。

一月四日

朝より外出することなく室に籠りて読書す。夕飯後點燈もなきて幽室にありて独り沈思黙考す。基督の死とゲッセマネの祈り日頃よりの疑問なりければ解決せんとしてなり。遂に次の如く

断定す。ゲッセマネの祈りは基督世にありて已に神の命ぜしことを果したれど尚ほ信仰の点に於て全からず且つ未だ心に充分ならざりき故に神若し許し給はば尚ほ之の世に在りて彼れの教を宣伝せんことは彼れの願へなりしならん。而して苦痛は彼れの肉体の死と共に来れり彼れの死に付ては吾が友の死に付て之れを知るを得たり人の死は如何に彼れに親しやくせし人々の間に信仰を起こさしむるかは議論に非ずして直覺的事なり基督の死によりて如何に人々の間に堅き信仰を起さしめしかハ燎然たることなり吾が維新前志士、仁人の死は如何に今日ノ文運に關連するかを恐れ誠に実に汝等に告げん

一粒の麦若し地に落ちて死なずば唯た一粒にてあらん。若し死なば多くの身を結ぶべし。吾れは跪きて吾が神に感謝しぬ。トルストイは基督の贖罪を否決しゲッセマネの祈禱ハ彼レがラストテムプテーションにして乃チフエアとファイイトとは彼れの心を苦しめしものなりと果然吾か心を得たり。

一月二十二日

朝の授業例の如し。午後も風雪ありしも図書館に行きてジャンを一頁足らず読む。ヘッケルのエボルーション・ラブ・マン^{*}を借れて四五頁読む。未だ本論に入らざれば意義を捉へ難

料し。

夜はトルストイの復活を讀みて記事肆に（原文一字空白）人の西比利遠てきに及びて叙景見るが如し。

* Ernst Haeckel, *The Evolution of Man: A Popular Exposition of the Principal Points of Human Ontology and Phylogeny*, 2 vols (New York, 1886). である。札幌農学校旧蔵書のうちにもある。

一月二十九日

夜はト翁の復活を讀む。

一月三十日

天氣よろし外出もされざれば兼而書きかけをきしトルストイ翁の肖像をとり出し書き初む一生懸命になりて画きしかは夜飯の少しく前に止む餘りよき出来ばいにもあらねど全く成りし上ならねば如何にとも云へ難ければ稍ニ望みを残しをくべし夜は復活と買へ来たりしダンテ神曲を讀む。夜学校にて茶話会ありたれど病氣よろしからねは行かず。

一月三十一日

午後より又もト翁を書き初む四時過ぎ迄かくりて顔の大部分と体の一部とを画き終る。鼻大にまづき心配せらる之れ阿ながつ余の罪のみに非ずして元來ト翁はぶ男なれば責任を分たざるべからず。今度のものは如何なるにや近よれば良く見ゆれと遠くより見ると非常にまづき心地せらる。

夜復活を讀む九時にぬ。

二月五日

歸りてトルストイを讀む一一時頃までかゝりて全篇を讀了す去年の四月より初めしも中途にて止めをりしに付き殆と満一ケ年を要せり。

二月八日

昼の間も停車場の方より多人数の大声上くるを聞きしか夜学校の歸りも或る料理屋の二階より例の萬歳やらんを聞く号外の鈴の音も急がしげニ走るを見て又何にか大事でもありしかと宿に歸りて号外を借りて見るに何日にもは似す、公使引上げ等の不隱の記事あり戦争も肆に迫まりし模様なり。日本国民は大和魂とやらをふり起て狂するなるべけれど劍を以て立つものは劍を以て亡ぶ人の子の教を信ずるものは同情の念を起す能はず

噫吾れ之の人々の間に立ちて如何なる行動をとらんか余は眞に盲目たるなり唯たまなる我か神に祈るのみ。

二月九日

午後よりハ風呂に行きて久しく捨ておきしトルストイの肖像を画く。

二月十日

人々の話しによれば已ニ平和破れて露国軍艦沈没し我軍旅順港を攻撃中なりとか

帰路線路ニ沿ふて黙想しつつ進む、已ニ平和望むべからず鉄火相見ゆるの止むを得ざるニ至りし上は吾れも又何をか言はん、唯だその悲しむべき報酬を謹んで待ち以て後世子孫の鑑として平和光栄を望ましむべきのみ、

二月十一日 紀元節

彌々宜戦詔勅下る吾等臣民は謹で陛下の大御心を翼賛せざるべからず

トルストイ翁の肖像を画き了る。絶対的平和論をとらぬ翁と日露戦争、如何ニ面白きコントラストぞ、

翁が像と対して此の戦争ニ付て如何なる考想を有しをれるにやなど思ふ、好翁願はくは自愛して世界平和論者の為め大々的氣骸を吐け、翁が像今後欄間ニかゝけて朝夕翁が高徳をしたはん、我が崇敬するニコライ師^{*}遂ニ退去を命ぜられしとか願はくは主のめぐみによりて平安彼の上にあらんことを、
拝賀式ニ於テ校長や、^{*}氣骸を吐けりとか伝ふ

* ヨアン・ドミトローヴィチカサートキン・ニコライ。

ロシア教会の聖職者。この頃ロシア教会の主教として神田駿河台に聖堂を建て、宣教にたずさわっていた。

* 札幌農学校校長佐藤昌介。

二月十二日

旅順港外ニ於て露艦十餘艘を沈没せしめしハ事実なるが如し、又号外によれば日本汽船一艘露艦の爲め秋田近海に於て沈没せしめられ露艦四艘は函館近海にありとの報ありしが五時頃江差砲撃せられたりとの虚報傳はり更に前の露艦四艘ノ内三艘は函館附近にて水雷にかゝりて沈没せりとの電報あり、小樽人土ノ戦々競々たり陸兵は多く滞在せりとか、本科一年にて提灯行列とかの発企せし由にて我級にも交渉ありしかど文部大臣ノ訓令もあればとてキヨ絶するに決す、遂に中止となる、

「汝の行なき信仰を人に表白せんと慾す、行なくして言語によりて信仰を人二語るの人ハ悲しむべき哉、世上滔々たる自稱基督教皆な之の亜流ニ非らざるなきか、何んぞ空しき信仰のみを有して実行を軽んずるの甚だしき。基督ノ贖罪を信ずるに非らざれば実行に入るを得ずと思謂する徒よ、古の聖人君子は如何異教徒たりと雖も汝等の仰望する天国に先づ入らんものは之の人々神の寵者たるは此の人々にあらずや、而して汝等は如何吾れ之れを知らず唯だ神の知る。夜学校二行く。

二月十三日

十一時半より校長の訓諭あり文部省より達せし運動ニ付てなり、市中行列は見合すべき筈電報来る、宣戰詔勅は決して喜ぶべきことに非らず世界平和の爲め人道の爲め悲しむべきことなりとせば戦勝豈にべん舞して欣ぶべき事ならんや、米国南北戦争は世界の義軍なりしと稱せらる然れども戦勝てリンコルンが満面の笑を見しものなく市民の行列を聞かざりき、之れ名は正義の戦なりとも行は神の道ニぞなき目を以て目をつぐなへ齒を以て齒をつぐなへりしかばなり、嗚呼東洋君子国の愛国者よ、汝等が目には神の怒り見へざるか人道の念存せざるか亡びに至るを知らずして徒ニ戦勝の甘きに酔へるものは禍なるかな、露

艦三艘沈没せしとは虚報にして今尚ほ行へ不明なりとか、午後は教育図書館二行く、文武会の規則校長の訓辞後直ニ總會を開きて特別会員などの修正を原案通り盡く可決す
少しく雪降りしかど温暖の日なりき

二月二十七日

午後より農学会あり校長の戦争と農業者の覚悟及び加藤泰治氏の欧米畜産談ありたれど共に不得要領にして徒に眠をもやうさしむるに過ぎず

二月二十八日

聖書講義に出席する為め八時二十分頃出かく。

……………

午後風呂に入り戦争と平和を読む。夜は河内氏宅を訪へ九時前に帰りて軍記物を読む。昨日頃の北鳴に飯田雄太郎氏の不敬とか不忠事件とかの記事あり時節柄愛国者の御機嫌にさわりしものなるべけれど直ニ被らすに露探の名を以てし警察も聞捨ならずと取調べ中とは噴飯の致りなり日本人の尻穴の小さきには物か云はれず。早く頑迷の旧思想をぬき捨てたきものなれど社会の木鐸を以て任する新聞記者連が皆々之の頑迷輩なれば日本進

運の前進も中々待ち遠きものなり

*伊東正三が主筆をつとめて刊行した日刊紙『北鳴新報』。

一九〇一（明治三四）年六月創刊、一九〇九（明治四二）年二月『北海タイムス』に吸収された。

三月三日 木曜 大暴風雪

飯田雄太郎君免職になりしとか、曲学阿世の徒よ、吾れは曾て汝を思慮ある基督教徒、品性ある紳士と思ひたりき然るに何事ぞ世界人道の大義をとりて平和博愛をとなうる之の弱き一義人をなやむる。自ら基督教徒と稱する以上は如何ニ曲解するも國家の無上權を信ずること能はざるべし、然るに世ニ阿り自己の地位を安全ならしめんが爲めに其の人の説るを信理と知りながら力弱きに乗じて直ニ其の職を免じ得たりとなして愛國者を氣取る嗚呼汝の道義心とは斯の如きものか、時代精神とは世ニ阿りて俗流と供に声を（判読不能）して真理を無視するの謂ひか吾れは以後汝が再び精神界ニ復活し来る迄は汝の説ニ耳かたむけざるべし噫神よ虎狼の間ニありて正義を説ふる弱き小羊の上に汝の恵を垂れ平安を彼れの上ニ下さんことを祈る。

夜は足助を訪問して時局問題ニ就て大激論をなす、帰れば坂本角館氏の所ニ来り居られたるにより十二時迄談話す坂本氏は

十時ニ帰らる。

三月四日 金曜 雪

昨夜足助を訪問して飯田氏事件を嘖概し談論平和論ニ移りて足助氏は現今は人民皆な戦争熱ニ狂せるときなれば沈黙を守りて寧に平和に復して平静ニ判断を下し得る時期を待つて平和論をとなうるを良しと云が余は然らず反て堂々平和論を懐けるものは此の際ニ大声叱呼して民心ニ訴るを良しと云へげき論數次ニ及ぶ

然れども要するに帰着するところなき議論なるを以て結着を見ずして中止す

今日は文武会より茨戸ニ遠足する日ニて余も行く積りなりしも昨日よりの大風雪尚ほ止まざれば思止まる。午後よりは全く霽れて天気となりたれど雪とくるにも至らず夜は夜学校に行く帰路明月團々として石狩平原の彼方夕張の山にかゝる。

三月十四日

朝、嘲風氏のトルストイ論*を読む。トルストイの宗教、及び人生觀を以て農民救済にホー芽せりと言はれたれど如可にや疑問の点なり

料 其の他は同意す。

午後より大雪降りとなり夜に入るも止まず三四寸積る。

夜学校に行く極めて寒し。

順路、旅順かん落の爲めにや二三十人の者ども提灯行列をなせる様なり、未だ前途も判らざるに之れ位の事にも喜ぶほどならば、敗報に接せば泣き行列でもせずばあるまじ

* 姉崎嘲風が、自ら主筆をつとめる雑誌『時代と思潮』のこの年三月号に載せた、「ロシアの國情とトルストイ」であろう。

五月二日

九連城大劇戦の電報来りて日本軍死傷六百位とか聞きぬ。

高山林次郎氏の吾人は現代を超越せざるべからざる語、新奇なることには非らねど、戦争を之の見地に立ちて考ふるに頗る趣味あり現代の思想を超越し能はざればこそ、戦争を是とし、愛国、人種など螻蟻の争をなして自ら得たりとなせど吾人平心虚気想ひを現代以上にはせて高遠の理想を味ふを得ば世上の争は誠に夢の如かるべし基督の一言も戦争ニ付て語らざるを見れば其の人の思想その人の信仰の如何ニ深きかを見て感嘆讚美の声を発せざるを得ず

九月十八日

十時頃より独立教会に行きて説教を聞き正午に帰る。

九月十九日

夜は南一条迄行きてトルストイの日露戦争論を買ひ求む。

* この年六月二七日付の『ロンドン・タイムズ』に発表された「トルストイの日露戦争論」の英訳からの重訳が、『平民新聞』三九号（八月七日）に「トルストイ翁の日露戦争論」として掲載された。おそらくこれをさすのであろう。当時南一條に『平民新聞』の売捌所があつた。

十月二十一日

竹田来り居りて夜食後皆々軍隊見送り二行きしかど余のみは残りて行かず

Wakaki hi no Onoide・偲草 後篇
札幌農学校の回顧

私が札幌農学校に入校したのは明治三十三年でした。

その年の三月に東京の郁文館中学を卒業したので、さてどの高等学校に志願しようかと思ふて居りましたが、ある時本郷の書店で「札幌農学校」という著書を買いました。その書を読んでみたら、札幌農学校は北海道だが、なかなか愉快な学校らしい。原来私の郷里は、その頃農業が隆んで、青年なども農業会を組織していた。そこで私は札幌農学校受験を志し、その五月札幌に行った。

有島武郎君は矢張り上級生として敬意は拂っていたが、一度も親しく話す機会はなかつた。たまに街路で行き逢つて御辞儀をする位であつた。その後、外国留学から帰られて、大学に教鞭をとられてから、遠友夜学校で一緒になつたり、又一夜は月寒牧場へ森本厚吉氏と二人で講演に來られたこともあつた。

この頃札幌には基督教研究の集會が二、三あつたが、一つは青年会寄宿舎を中心としたもので、足助、末光、河内、逢坂、橋本などが、これに属し、有島、森本、木村君などがリードしていたのである。その他には石沢くんがリーダーとなつてゐる、メソジスト教会の信者からなるもので、竹田、池田、藤井などがこのグループであつた。

私はこれらの人々とは遠友夜学校を中心として極く親しく交

際をつづけたが、有島氏中心の會合には出席しなかつた。

その頃原教授の官舎に恩地剛君が寄宿していたが、この二階を会場として、今はアルゼンチンで大農場を經營し、成功者となつていられる、前に述べた農學博士の伊藤清蔵氏をリーダーとして、聖書研究会を催ふし、あるとき十名計り集まつて、感想、感話を述べ合つて、私は旅行から得た、それを話したことがある。そのとき集まつた人々は誰れ誰れであつたか今は記憶にない。

それからメソジスト教会の米國婦人ウィバー氏のバイブル講義に藤井氏の勧誘を受けて出席したことがあつた。そうしてこの婦人が三十七年に帰國のときに受講者一同で記念の撮影をした。

私は前にも述べたように、その頃はトルストイの崇拜者であつたから、無抵抗主義、平和論者であつた。ところが明治三十七年に日露の平和が破れて、戦端が開かれなければならなくなつた。然るにその頃は意外に平和論者が多くて、内村鑑三氏は万朝報に堂々と平和論を述べて世論を啓蒙した。又、当時農学校の図画の教師に飯田雄太郎という人が居たが、この人は前にも書いたように、矢張り平和論をとへたので世評が轟々として非難をあげられたので、学校でも遂に退職をさせなければ

ばならなくなった。私等の仲間にも逢坂、足助などは何れも平和論者ではあったが、外に向かつて宣伝するまでには至らなかった。私も無論、そのときは、平和主義者と目されていたし、自分でも戦争には反対であった。だから日露戦争時代には一度も出征兵の流露を停車場に歓送したことはなかった。

一体にこの頃は合同自炊生活がよくあつて半沢君を首長として河内、末光、足助等五、六人でやっていたが、私等の近所にも色部等七、八人で矢はり自炊生活組があつたし、大光寺も又農芸科の畠山氏と自炊生活であつた。

日曜には竹田と藤井はメソヂスト教会に行き、橋本は独立教会へ行くので、時々私は私も独立教会等、橋本のお伴をして行った。

又時たま橋本先生のお嬢さん達が遊びに来られたし、建部のKちゃんは近所だったので、よく子供を連れて遊びに来られた。この人は後に藤井の細君になられた。

この頃は私は夜学校の授業は受け持たなかつたが、日曜日の午後の会合、リンコロン会、すみれ会にはよく出かけて生徒等と話し合った。

夜学校ではリンコロン会、スマレ会など男女生徒の会合の外に春の遠足としては藻岩山の登山か真駒内、月寒などへ出かけ

て楽しく一日を遊び暮らした。又秋には仲秋の明月に豊平河畔と中島公園に行った。月光を肩にあびながら涼風に吹かれて足助などと漫談を交はしながら歩きまわった思い出はなつかしいものである。

私はこの頃「トルストイ」の崇拜者であつた。トルストイの著書は片っ端から丸善の「学燈」を見ては買い込んだ。まだ邦訳書のない頃で、英訳書計りであつたから短篇物は殆んど読まれたけれど、大冊物は眺めるだけで、中々読み終われなかつた。ただ「レヂュアレクシヨウン」復活だけは、何日かかかつて読了した。それから何年かたつて邦訳もで、演劇にも仕組まれて、松井須磨子などによつて演出され、「カチュエーシャ」劇として世間に流布されたのはそれである。

私の「トルストイ」崇拜はその根源は徳富蘆花の「トルストイ」伝によつて培養されたものである。この頃蘆花の文名は隆々たるもので「ホトトギス」「思い出の記」などは非常に評判で、盛んに学生間にも愛読された。

又同室の東郷君が、私の描いたトルストイの肖像を見て、御尊父の写真をだして、写してくれと頼まれたが、とうとうこれ

は、うまく描きかねた。

そのときの学校の図画の先生は飯田雄太郎といつて性質の一才変つた人であつた。日露開戦のときに、非戦論をとなえてそんなことのために、教職を辞めたなどのうわさがあつた。

私はその頃、足助であつたか、末光であつたか、いづれその仲間の者から徳富蘆花の「思い出の記」を借れて読んだ。面白いなあ、と思つた。それから又民友社の十二文豪の内の矢張り蘆花著の「トルストイ伝」を借れてよんで、こんどはスツカリ「トルストイ」に敬服して、今度はトルストイの著書を読み初めた。勿論その頃はまだトルストイの著書の日本語訳はない時であつたから、東京の丸善書店から英訳書を取りよせて読んだ。短篇物は簡単に読み終へられたが「レヂュアラレクシヨン」(復活)

などは毎日数枚づつ読んで、何ヶ月かかつて読了したろう。これがその後日本でも翻訳され、劇にもなつて帝国劇場でも演ぜられ、その頃評判だつた「カチューシャ」劇である。

「ウワー、エンド、ピース」なども夜学校の報酬で買ひ求めたが、これはとうとう手をかけかねた。その後「トルストイ」全集も出版され、私も買ひ求めはしたが、「戦争と平和」や「

」(原文空白)のような大部冊のものは日本語でも読みかねる。

丁度その頃は、日露戦争が始まつた時でもあつたが、露國撃つべしの愛國心が全国民を風靡するとともに又平和論者も出てきた。内村鑑三の如きは平和論をとなえて万朝報新聞社を退社し、その他、社会主義の人々も同様に平和論者であつた。

足助素一のことは、私として忘れ難い旧友の一人なので、いまままで度々彼れのことを書いたし、また事あるごとに思いだしては、彼れのことを追憶する。今度もまた、「足助素一集」をとりだして、彼れの文章や河内、末光の書いた、彼れの追想記を讀んでみた。

私の札幌農学校に入校したのは明治三十三年の九月であつた。その頃の学校は九月に初まつて、七月に終わるのが規程であつた。そのとき入学を許されたのが約五十人、旧校舎の北講堂の北側の二階教室が私等の教室であつた。そのときに私と同じ机で隣り合はせて腰かけたのは、足助素一であつた。足助は前年三十二年に京都の同志社中学から入学したのださうな。どういふわけか進級しないで居残り組になつたのである。こ

資 料
うことから、私はまづ足助と親しくなったのであろう。

解 説

ここに紹介するのは、故川嶋一郎氏の、札幌農学校在学中の日記および、晩年に書かれた回想『Wakaki hi no Onoide』・『徳草 後編』の一部である。

川嶋一郎氏は、一八八〇（明治二三）年、岩手県二戸郡福岡町の酒造家の家に生まれ、一九七六（昭和五一）年に亡くなられた、札幌農学校卒業生。経歴の概略は次の通りである、（同氏の回想録『七十七年の回顧』、一九五六年、私家版、による）。

一八九五年（明治二八）年、郷里の小学校に通った後、仙台に出て日進学舎、さらに仙台数学院に学ぶ。

一八九六（明治二九）年、上京して早稲田中学校に入学。

一八九八（明治三一）年、郁文館中学校に転校。

一九〇〇（明治三三）年、郁文館中学校を卒業し、札幌農学校予修科に入学。

一九〇一（明治三四）年、「山鼻村屯田兵村で自炊生活をした。この秋より同志と共に聖書研究を始めた。助教授の伊藤清蔵博士が指導者であった。」（『七十七年の回顧』より、以下同様。）

一九〇二（明治三五）年、七月、予修科卒業（第四期）。九月、本科に進み、「寄宿舎に入舎して東郷実君（後に農学博士、文部政務次官となる―原文注）と同室す。この頃我はトルストイの著書を蒐めて愛読した。」

一九〇三（明治三六）年、「新渡戸博士の創設せる遠友夜学校に教鞭をとる。当時の校長は農学士滝臣弼氏で同僚は河内完治、北沢小八郎、池田競、竹田茂、足助素一、末光績其の他数氏であった。」

一九〇四（明治三七）年、七月、「畜産科専攻を決定し橋本左五郎教授の指導を受けることとなる。」一〇月、「藤井（―為次郎）、橋本（―健次郎）、竹田（―茂）の四人（―二三人の同級生のうちの四人である。筆者注）で、北一条西一〇丁目に一家を構ひ、自炊生活を営む。三人とも基督信者であった。」

一九〇五（明治三八）年、一月、「自炊生活をやめ、一家を解散した。」

一九〇六（明治三九）年、七月、札幌農学校を卒業（第二三期）。一月、農商務省月寒種牛牧場へ勤務。

一九一〇（明治四四）年、五月、農商務省畜産科に転勤。

一九一六（大正五）年、千葉県庁に転勤。

一九二二（大正一一）年、千葉県庁を辞職して郷里に帰り、以

後郡農会長、福岡町会議員、福岡町長（一九三〇—一九四六年）等を歴任。

一九七六（昭和五二）年、九六歳で永眠。

川嶋氏は非常に几帳面な方であられたらしく、先にふれた回想の小冊子『七十七年の回顧』の他に、札幌農学校在学中の一九〇三、〇四（明治三六、三七）両年度の日記と、一九三五（昭和一〇）年頃から四九（昭和二四）年にかけて記された回想『Wakaki hi no Omoide』・『偲草 後編』とが残されている。

日記は一九〇三、〇四年とも市販の当用日記に、毎日ほとんど空白なく、詳細に記されている。『Wakaki hi no Omoide』・『偲草 後編』は、それぞれ大学ノート一冊に記されて、生涯の全体にわたっており、札幌農学校在学当時を記すについては、右の日記を参照されている。

近年札幌農学校についての調査研究が進んでいるが、依然として学校側の制度・行政等が主であり、肝心の学生の実生活や意識については目を向けられることが少ない。その空白を埋める第一次資料として、志賀重昂・有島武郎・足助素一らの日記があるが、川嶋氏は足助の親友であり、二人の日記は同じ時期について照応している。しかもその時期が日露開戦前後であり、

札幌農学校の学生と学校当局の戦争に対する態度の一面がよくうかがわれるので、ここにごく一部を抜萃して紹介することとした。

一九〇三、〇四年の日記の中心をなしているのは、授業・試験など学校生活、交遊、遠友夜学校、人生と社会についての思索の記録である。学生の側から見た当時の札幌農学校の記録としてもまことに興味深いが、ここでは人生と社会—特に日露戦争—をめぐる読書と思索についての記述を抄録した。抄録した部分の分量は全体のせいぜい二〜三パーセントかと思われるが、地方の学生へのトルストイ主義の波及、キリスト教やトルストイ主義にもとづく戦争批判など、日露戦争下の民衆意識の史料として、価値は少なくないと思われる。抄録した部分以外に、一九〇三年日記の末尾には、五ページにわたって、一年間の人生観・宗教観の発展を総括した詳細な記事があるが、割愛した。また一九〇四年日記の収支簿には、二月、三月にわたって『平民新聞』三五銭という記入があるほか、木下尚江の『火の柱』を平民社に注文したらしい記入もある。『Wakaki hi no Omoide』と『偲草 後編』とは、どちらも大体時期を追っているが、時々日付の順とは関係なしに記されている場合がある。また同じことがらについて、大すじでは共通しているが、細部

までは重複せず互に補ひ合う記述がとびとびに現われることもある。本稿では、両冊から、一九〇三年、〇四年日記からの抜萃と併行する記述を抄録し、出来だけ時期の順に従い、また、同種の記事をまとめるように排列しなおした。

筆者が川嶋一郎氏の日記や回想の存在を知ったのは『北大百年史 通説』(ぎょうせい 一九八二年)に執筆したことからであった。筆者はかねて、大学史の研究が、日本の歴史研究の中で立ちおけていること、とりわけ学生側からの研究が貧しいことを痛感していたので、志願して、学生の中のいわば理想主義派に焦点をあてた小論を寄稿した。その一篇が「札幌農学校と社会主義」である。執筆のために足助素一の札幌農学校在学中の日記(秋田雨雀他『足助素一集』足助たつ私家版、一九三一年、所収)を通読した筆者は、札幌農学校当局が、教師の飯田雄太郎を、おそらくはその非戦論を理由として解雇した⁽¹⁾、それまで大学史関係の資料で接したことがなく、誰からも聞いたことのない事実を知って驚いた。そこで前記の小論では、この

ことが学生の間にかねて危惧されており、解雇を知った学生の間で大きな波紋をなげたらしいことを示すために、足助が「川嶋」という学友と一夜激論を戦わした、日記の一部を紹介した。ところが『北大百年史』の刊行後、一九八二年九月、筆者は、

未知の、当時北海道網走水産試験場長であられた川嶋昭二氏から長文の懇切な手紙をいただいた。それには同氏が足助素一日記に出る「川嶋」の二男であり、北大理学部植物学科に学ばれたことを説明されており、足助と川嶋の一夜の激論を川嶋のがわから記録した日記の一部(一九〇四年三月三日、四日)の抄録が同封されていた。

二人の親友の、日露戦争に対してとるべき態度および学校当局による非戦論教師解雇をめぐる一夜の激論について、当事者の両方が日記に詳しい記入をしており、その一方にほとんど八〇年の後に接しえた、ということとは筆者にとって大きな驚きであり感動であった。

一九八七年九月には、川嶋昭二氏が父上の日記二冊と回想二冊その他の伝記資料を携えて来訪され、附属図書館北方資料室の秋月俊幸氏とともにお話をうかがい、日記、回想の全部を拝見することが出来た。同氏によれば、同氏が知られる一郎氏からは、日記に現われるような時期がかってあったとは想像できなかったよし。また父上の学友であった方々も父上が「非常に温厚で物静かな学生であった」と評されていたよしである。事実、私が『北大百年史』のために調べた農学校学生で、社会主義、社会問題に関心をよせる一群の中には、川嶋一郎の名は出

て来なかった。また、世に出られてからの川嶋一郎氏は、篤実な畜産技師として働かれ、また地方の名家の家父として、名望家として、同族と郷党のために尽くされた様子が、伝記資料からよくわかれる。その意味で同氏は、学生としても、社会人としても「ふつうの人」であったといえよう。

しかし、筆者は逆に「ふつう」の学生が、これだけ真摯な思索と読書をし、遠友夜学校のために尽くす生活を送っていたという事実には、札幌農学校と明治という時代の一面を示されて、深い感動を覚えるのである。川嶋一郎氏の日記と回想は明治の政治思想史という関心から、日本におけるトルストイの受容というテーマにしぼっただけでも、トルストイがこのような北海道という遠隔地の畜産専攻の「ふつう」の学生にまで英訳で読まれ、たゞちに人生の指針となつてゆくいきさつは、貴重な証言といえる。

筆者は、川嶋一郎日記に触発されて、札幌農学校と札幌市民の間での、日露戦争批判について調べ、日本平和学会一九八七年春期研究大会で、「日露戦争と非戦論—札幌農学校の内と外」と題して報告をし、資料などを補った上、同年の法学部公開講座でも紹介した（これに加筆し「非戦を訴えた札幌市民たち」と題した文章が深瀬忠一・森杲・中村研一編『北海道で平和を

考える』北海道大学図書刊行会、一九八八年、に収められた）。筆者にとつては、これらの報告でとりあげた人々について、その後の大正デモクラシー、戦後民主主義の時期にいたるまでの生き方をたどることが次の課題であった。人口四万余の小都市と学生四〇〇〇人弱の農学校という、大日本帝国の細部の動きから、大日本帝国とその中の自由主義・戦争批判の動態をとらえるというねらいである。筆者はこの仕事をまとめて、五十嵐・藪岡教授への感謝のしるしとしたいと思ひ立ち準備をして来たが、怠慢のためまとまらなかつた。中途半端な論文よりは、私のこうした関心をうながすものになつた、川嶋一郎氏の日記・回想自体をこの機会に紹介させていただくことにしたいと考えたのが本稿である。それにしてもこの日記と回想の全体は膨大であり、筆者の専攻と前述のような関心に従つて、一部の抄録にとどめざるをえなかつた。五十嵐教授・藪岡教授に長年のお働らきと御好意への感謝と、あわせておわびを申し上げる。また御尊父の日記・回想の紹介をお許し下さり、種々御教示いただいた川嶋昭二氏に御礼申し上げます。なお、日記・回想とも同氏の御好意により、全文を附属図書館北方資料室でコピーさせていただきます、同室に収められた。一九八八・一一・二六

(1) 飯田雄太郎は、慶応三年東京市生まれ。「ヴェルベック」(Verbeck)に英語学を、遠藤政之助に数学を、浅井忠に絵画を学び、東京電信学校を卒業。通信技師をつとめた後一八九四(明治二七)年から北海道尋常小学校で教え、一八九八(明治三一)年、札幌農学校予修科及土木学科画学講師となり、一九〇四(明治三七)年二月二十九日、「解職」されている(北海道大学附属図書館蔵「退職者履歴資料」二 1 明治36—37」による)。飯田は農学校長佐藤昌介と同じ札幌美以(Methodist Episcopal)の略)教会の会員であった。飯田雄太郎は解職された後も、少なくとも同じ年の秋までは札幌にとどまって『平民新聞』の読者会を組織するなどしているが、その後東京に出たようである。一九〇六(明治三九)年、日本最初のエスペランティスト教会の設立とともに会員になっているが、その後についてはまだ知りえていない。

(2) 明治期のトルストイ受容については、研究が少なくない。比較的新しいものとして、例えば柳富子「明治期のトルストイ受容(上・下)」、『文学』一九七九年三月、一〇月を参照。しかし、柳氏も簡単にふれられているが、明治期のトルストイ受容では、邦訳によらず英訳による

ものの比重が大きかった。またトルストイの翻訳や彼についての評論を書く者の場合ではなく、普通の読者が英訳をどのように読んだかについては、河上肇の場合(一九〇五年一月二八日「我宗教」を読む。それが彼に教職をなげうって「貧民教育」に献身する決心をさせた。河上肇「余が懺悔と余が信念」『河上肇全集』第三卷、岩波書店、一九八二年、四六八頁)など主要な事例があるにもかかわらず、これまでほとんど研究がないようである。